

『阿闍世王經』抄本の梵文写本

加 納 和 雄

はじめに

近年の、チベットに伝存する梵文写本の研究の進展には瞠目すべきものがある。ポタラ宮蔵本とノルブリンカ蔵本の影印を有する中国蔵学研究中心の宗教研究所梵文具葉經研究部門や、シャル寺奥の院リプクの旧蔵本の影印を有する北京大学の梵文具葉与仏教文献研究所の活動と研究成果については、周知のごとくであるが、2013年にはチベット自治区の社会科学院が西藏貝葉經研究所を新たに創立している。同研究所は『西藏貝葉經研究』（西藏藏文古籍出版社）を2014年に創刊し、その指針を公示した。同研究所のもつ、チベット伝存の梵文写本を全て新たに影印化したという『西藏自治区珍藏貝葉經影印大全』61巻（未公開）には特に注目が集まっている。

大乘經典の新出梵本に関しては、近年ではアフガニスタンとその近郊から出土した様々な梵文断簡が注目されてきたが、チベット伝存写本には『虚空蔵所問經』（ポタラ宮蔵 34 枚の紙写本）、『大雲經』（ポタラ宮蔵 40 枚の紙写本およびノルブリンカ蔵 58 枚の貝葉）、『菩薩蔵經』（ノルブリンカ蔵）など、一定の分量の揃った經典が報告されており¹⁾、大乘經典研究の進展に期待が高まる。本稿で扱う『阿闍世王經』（抄本）の梵本はごくわずかな断片ではあるが、初期大乘經典の原典を知るうえで貴重な新出資料といえる。

既知の資料

『阿闍世王經』の既知の基礎資料としては、漢訳四本、蔵訳一本、それに加えて梵文断簡がある²⁾。すなわち支婁迦讖訳『阿闍世王經』（大正 no. 626）、竺法護訳『普超三昧經』（大正 no. 627）、失訳『放鉢經』（大正 no. 629）、法天訳『未曾有正法經』（大正 no. 628）、蔵訳 *'Phags pa ma skyes dgra'i 'gyod pa bsal ba zhes bya ba theg pa chen po'i mido* (D no. 216, P no. 882) が完本として伝わる。そして梵文断簡は、アフ

ガニスタンに由来するとされる五世紀頃のものであり、スコイエン・コレクションに含まれ、その影印も出版されている（以下「スコイエン断簡」と略、Harrison and Hartmann 2000）。他文献において本経が引用されることはあるが、それら引用から本経の梵文が回収される例は知られていない。したがって同経の梵文断片としては、上記のスコイエン断簡のみが従来知られており、そこに本稿で紹介する梵文写本が新たに追加されることになる。

写本の由来

このたび確認された『阿闍世王経』の梵文写本は2葉である。ただし後述のようにそれは経典そのものではなく、その体裁から判断して、いわゆる抄本の類と理解される。その写本の詳細に入る前に、まずその由来について簡単に触れておく。同2葉は、紐穴が2つ穿たれた、54.5 × 5.3 cmの大きさの貝葉を素材とし、12世紀頃のいわゆる Proto-Śāradā 書体で記されている。この2葉は、10数点からなる複数作品を収める一帙の梵文貝葉集成本に含まれる。この一帙の貝葉本は、12世紀頃³⁾に恐らくカシュミールあたりで作成された後、チベットに渡り、そこでばらばらに分蔵されてしまう。そして目下、泣き別れ写本として、ポタラ宮に一束（46葉）とシャル寺奥の院リプクに一束（41葉）ずつが確認されており、都合87葉が確認されている。ただしこの87葉は所々歯抜けになっていて完本ではない。つまり87葉以外に、行方不明になっている束が、もう一つ二つ、チベットのどこかにあるはずである。そして本稿で扱う写本2葉もやはり、完本ではない。

なお、この貝葉本所収の作品は、瑜伽行派をはじめとする論典の注釈類が大半を占める。そのため、大乘経典である当該の『阿闍世王経』抄本は、これらの中において異色であり、他作品との内容的な関連性は見出し難い。この集成本全体の詳細およびそこに含まれる作品については、Ye, Li, and Kano 2013, 加納 2014, 加納・李・葉 2015 を参照されたい。

写本の内容

当該の2葉は、下記のように、文の途中から始まり、文の途中で終わっている。そして2葉それぞれの裏面左端欄外には2と3という数字が記される。以下に提示するのは、同2葉の冒頭と末尾、つまり1枚目表面（2r）冒頭行と2枚目裏面（3v）末尾行の翻刻である。全体の翻刻は、李氏と葉氏との共著論文の中で提示する予定である。丸括弧は翻刻者が補った語句、角括弧は写本において不明瞭な文

(172)

『阿闍世王経』抄本の梵文写本（加 納）

字を示す。

写本冒頭, fol. 2r1: (6 文字分汚損) hitārthaṃ sarvadehinām | sādhu yūyaṃ prapadyadhvaṃ kṣaṇasam̐pat sudurlabhā || vīkṣadhvaṃ lakṣaṇaiś citraṃ kāyaṃ buddhasya bhāsvaraṃ | jñānena pāramiprāptaṃ (*read: °tām?*) ko bodhim prārthayen na tām | anujānītam ā (?) yūyaṃ agārād anagārikāṃ | ihaiva pravrajīsyāmi durlabhā hi tathāgatāḥ || pitarāv enam āhatuḥ | prārthayām eva yad bodhiṃ svayam asyārthinas tayā | anusi(*read: śi*)kṣāmahe tubhyas pravrajyām prati putraka || iti hi śāriputra sa dārakas tau ca pitarau paṃcaśatamātrāṇi ca prāṇino bodhicittam udayād ya (*read: pra*)

写本末尾, fol. 3v10: pitānena tu (mātā)pitarāv iti tathaivākaroṭ* | gatvā ca yathāva[n]tyaveday]ad ādyaḥ (|) sādhu bhoḥ puruṣa yas tvam̐ satyaṃ vadasi bhūtaṃ vadasi yathā kāri tathā vādī yas tvam̐ tathāgatasya puratas satyāṃ vācaṃ bhāṣase 'visaṃvādakas tvam̐ ity uktvā bhagavān āha | api tu khalu punas tvam̐ bhoḥ puruṣa svacittadhārāṃ pratyavekṣasva (|) katamena tvayā cittena bho mātāpitarau jīvitād vyavaropite (*read: vyavaropitau*) atītenānāgatena pratyutpannena vātītaṃ cittam̐ kṣīṇam̐ vigatan niruddhavi pariṇatam̐ na deśastham̐ tan na [de?] śakyaṃ prajñāpayitum (|) anāgatam̐ asaṃprāptam̐ tad api

冒頭箇所は、過去世において商人の息子だった時の釈尊が、自分が出家する許可を両親に懇請するために偈頌を発する場面であり、同経の第3章後半に位置する。末尾は、両親殺しの男が釈尊を表敬して、釈尊が彼に対して、三世の心が本来清浄であることを教え示す場面であり、同経第11章前半部にあたる。すなわち同2葉が抜粋する経文は、同経の支婁迦讖訳にして大正15:394a23-403a23、竺法護訳にして大正15:412c28-424b21、藏訳デルゲ版にして228b5-258a6に相当する範囲からのものである。

上記2枚は第2葉から始まっているので、冒頭葉が欠損していることがわかる。そして第3葉の後には、未発見であるが、続きの貝葉がもう1葉あったと予想される。つまり全体はもともと4葉からなっていたが、そのうち真ん中の2葉のみが現存していると推定される。現存2葉 (fols. 2-3) の内容は、全13章からなる『阿闍世王経』のうち、第3~11章にまたがっており、そこにおいて要点となる文章を抜粋している。そして残余の未発見部分の分量を勘案すると、第1~3章途中までを含む冒頭葉と、第11章途中~第13章および奥書までを含む最終葉とが欠損していると考えられる。当該2葉が含む同経の範囲は下記のとおり（分節は宮崎氏の暫定訳のそれに従う、諸本諸訳の対応箇所は宮崎2012:34-35参照）。

3章 §§25 (Ms. 2r1), 26, 27

4章 §§1, 2, 3, 5, 6, 9, 10, 11, 12

- 5 章 §§3 (Ms. 2v1), 4, 5, 6, 8, 11, 14, 15, 17-18
 6 章 §§1-4, 5
 7 章 §§1, 2, 3, 4 (Ms. 3r1), 5
 8 章 §1
 9 章 §§1, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 11, 12, 14, 16, 17, 18
 10 章 §§1, 2 (Ms. 3v1), 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 12, 13, 23, 24, 29
 11 章 §§1, 2, 3, 5

スコイエン断簡との関係

スコイエン断簡から回収されている同経の内容は下記のとおり：3 章§13, 14, 10 章§3, 4, 21-27, 11 章§1, 2, 5-10, 12-17, 12 章§8-10. 本抄本とスコイエン断簡の間には内容の上で重なる箇所が、10 章と 11 章にわずかに存在する（上記に太文字で示した箇所）。しかし本来完本であったであろうスコイエン断簡と、抜粋・佚文集の体裁をとる当該抄本写本との間には、その体裁に大きな違いがあり、厳密に対応する文章はほぼ無い。そのため、両者のテキスト伝統の系統の異同を判断する決め手は、今のところ見出し難い。ただし両梵本を相互補完すれば、その梵文原典がほぼ回収できるような節もある。例えば、11 章§5 は、前半部が抄本から、後半部がスコイエン断簡からそれぞれ回収でき、合わせると同節のほぼ全体の梵文が得られる。

例、11 章§5：梵文抄本 3v10: katamena tvayā cittena bho mātāpitarau jīvitād vyavaropite (read: vyavaropitau) atītenānāgatena pratyutpannena vāṭitaṃ cittaṃ kṣīṇaṃ vigataṃ niruddhaviparinataṃ na deśasthaṃ tan na [de] śakyaṃ prajñāpayitum (l) anāgataṃ asaṃprāptaṃ tad api (写本完)

Schøyen 断簡：(. . . cittaṃ hi bhoḥ puruṣa nādhyātme kāye avatiṣṭhate na bahirdhā viṣayeṣūpati-ṣṭhati nobha)yam aṃtareṇopalabhyate | cittaṃ hi bhoḥ puruṣa na nīl(am . . . na sphāṭi)k(ā)varṇaṃ | cittaṃ hi bhoḥ puruṣa arūpi ani(darśanam . . .)m asadr̥ṣaṃ mayopamaṃ | cittaṃ hi bhoḥ puruṣa na ta (. . . raktaṃ na duṣṭaṃ) na mūḍham | cittaṃ hi bhoḥ puruṣa nābh(i)sa(m)karoti | na karoti | na vedeti | na pratyānubhavati | cittaṃ (hi bhoḥ puruṣa prakṛtivyūddham na saṃ)kliṣyati na viśudhyati | cittaṃ hi bho puruṣa na iha (nānyatra nobhayam anta)reṇa anyatra | ākāśasamaṃ tac cittaṃ asamadr̥ṣaṃ avijnapanīyaṃ | tatra paṇḍitena niveśo na (karaṇīyaḥ . . .) pratiṣṭhānaṃ na karaṇīyaṃ | niketo na karaṇīyaḥ (adhikāro na kara)ṇīyaḥ | aham iti vā na karaṇīyaṃ | mameti vā na karaṇīyaṃ | niśceṣṭaṃ bhoḥ puru(ṣa . . . | nāhaṃ bhoḥ) puruṣa evamadhimuktānāṃ kleśaṃ vadāmi na durgati(śūpapattiḥ | tat ka)sya hetoḥ | nāhaṃ bhoḥ puruṣa evamadhimuktānāṃ kleśaṃ vadāmi | na durgatiśūpapattiḥ | tat kasy(a hetoḥ yā cittasya prakṛtī sā na saṃkliṣyati na viśudhyati) na gatīṣu pratisaṃdadhāti (Harrison and Hartmann 2000: 194-195, no. 7a-b)

(174)

『阿闍世王経』抄本の梵文写本（加 納）

（竺法護訳）以何所心危二親者？ 用過去心，当来心乎？ 現在心耶？ 其過去心即以滅尽。其現在心即以別去，無有処所，亦無方面，不知安在。当来心者則亦未至（=梵文抄本），無集聚処，未見旋返，亦無往還。子！ 当知之。心亦不立於身之内，亦不由外，亦無境界，不処兩間，不得中止。察其心者亦無五色：青，赤，黄，白，黒。子！ 当了之。心者無色，亦不可見，亦無所住，亦不退轉，無有言教，不可執持，猶若如幻。子！ 欲察心不可分別，不可解了，不可名姪，不可究怒，不可知痴，無姪，怒，痴。子！ 当知心無生死行，亦無所作，亦無所現，亦不現在。心者清浄，亦無垢染，亦無浄者。心不在此，亦不在彼，不在異処。猶如虚空，亦無等倫，亦無色像，亦無言教。有明智者不当依倚。勿得言吾，謂是我所，莫得造処。無得為想，莫造畢竟。勿有所為，無言己身。勿云吾我，莫念過去。所以者何？ 子！ 当知之。一切諸法悉無所住，猶如虚無。子！ 且聽之。解如是者仏不謂人於法有脱。若染汚者，不帰惡趣。設心清浄而無垢染，則無諸趣。
（= Schøyen 梵文断簡）⁴⁾

テキストの系統

『阿闍世王経』の諸本は主に二系統あるといわれる（宮崎 2012）。つまり〔A〕支婁迦讖訳，竺法護訳，スコイエン梵文断簡，〔B〕チベット訳，法天訳である。当該の梵文抄本の系統調査は今後の課題としたいが，その系統分析の手がかりを示す興味深い例がある。例えば本抄本に含まれる一節（3v4-5）⁵⁾は，竺法護訳（10章§8）に対応箇所がみられるが，蔵訳（デルゲ版 251a7-b6）には対応箇所がない。それ以外の箇所において本抄本は，概ね竺法護訳と蔵訳と両方に合うので，この一点だけを根拠にしてテキストの系統を断定することはできないが，類例を積み重ねればその性格が今後明らかになるかもしれない。

抄本編者の挿入語

当該の貝葉 2 枚は，『阿闍世王経』の文章を抜粋しながら，時折，抄本の編者自身が語句を挿入している。しばしばみられるのが，次のように，*ity ārabhya*（「云々」）と言って，文章の途中までを引用しておいて，続きの部分を割愛するケースである。

（例 1）2v9-10 [7 章§1] : *rātryā madhyame yāme bodhisattvapitaka(2v9)prave[śa]m adeśayat* nāsti sa kaścīd dharmo yo na bodhisattvapitakānupraviṣṭa ity ārabhya ||*

（例 2）3v4 [10 章§7] : *na tvayā kaścīd dharmāḥ karaṇīyā ity ārabhya ||*

その他，関係節（*yāvat... tāvat*）を挟み込んで，途中の場面描写を割愛する例もある。

（例 3）3v6 [10 章§13] : *tato rājākāra[buddhyā] duṣṣayugaṃ yāvat pratyarpayati tāvad āryas tirobabhūva ||*

おわりに

最後に、本抄本がいかなる目的のもとに編纂されたテキストであるのかについて触れて結語に代えたい。大乘経典には様々な種類の抄本がある。

たとえば、龐大な分量の経典のエッセンスを短い呪文の中に圧縮し、経典読誦の功德を手早く得させるために作られた大乘経典の陀羅尼類がある。ネパール伝存の陀羅尼集類の梵本などに含まれる『楞伽経陀羅尼』(*Laṅkāvatāradhāraṇī*)、『法華経陀羅尼』(*Saddharmapuṇḍarīkamantradhāraṇī*)、『三昧王経陀羅尼』(*Samādhirājadhāraṇī*)、『如来秘密経陀羅尼』(*Tathāgataguhyakadhāraṇī*)などがそれであり⁶⁾、見方によっては『般若心経』もその中に含まれるかもしれない。

あるいは、アンソロジー的に経典の文言を抜粋して編纂された *Sūtrasamuccaya* や *Śikṣāsamuccaya* のようなテキストもある。また『楞伽経』「肉食品」から偈頌のみを抜粋したテキストもある (Vinita 2010)。これらは特定のテーマのもと、それに見合った経文を寄せ集めて作られたものである。

しかし本抄本は、いずれとも性格を異にしている。核となる文を抜粋することによって経典の内容をコンパクトにまとめる本書は、時として文脈が切断されストーリーの流れを掴みにくくしてしまうことはあるものの、基本としては、『阿闍世王経』全体の内容を学習者などに手早く伝えることを目的として編纂されたのではないかと推定される。それは、例えば陳那が『俱舍論』の要文のみ抜粋して短く編纂した *Abhidharmakośavṛttimarmapradīpa* (D no. 4095, P no. 5596) のごとき性格の抄本に比せられるのではなかろうか。

謝辞 李学竹氏、葉少勇氏には新出梵文資料の使用に関してご理解とご協力頂き、宮崎展昌氏には同氏が作成中の『阿闍世王経』蔵文和訳および蔵漢対照校訂本を特別にご提供頂き、多くの御教示を賜った。記して謝意を表します。本拙稿における同経の分節は、宮崎氏の訳校訂本のそれを使わせて頂いた。

- 1) 加納 2012.
- 2) 同経の先行研究および既知の資料の詳細は宮崎 2012 を参照。
- 3) 同写本の書写年代 (12 世紀頃) は類似する書体をもち、奥書に年代を明記する写本 (樺皮洋装、西藏博物館蔵) から予想しうる。またその書写年代を支持する別の論拠もある。すなわち同帙に含まれる作品のひとつ *Mahāyānottaratantraparicaya* には、11 世紀中葉から後半にかけてカシュミールで活躍した人物 Sajjana の手になる偈頌が、「我が師」の教言として引かれるので、その点から判断しても、この集成本全体の成立時

(176) 『阿闍世王経』抄本の梵文写本（加納）

期は12世紀頃とみられる（加納2014参照）。

- 4) 同竺法護訳のテキストは宮崎氏の準備中の校訂本を使用させて頂いた。蔵訳はデルゲ版258a5-b6に相当。
- 5) 本抄本3v4-5: *cittaṃ mahārāja arūpy anidarśanam apratigham avijñaptikaṃ māyopamaṃ nādhyātmaṃ prajñāyate na bahirdhā nobhayam antareṇa | prabhāsvaraṃ hi cittaṃ (l) yā māhārāja cittasya prakṛtir nnāsau samkliśyate na viśu(dhya)ti na rajyati na mu(v5)ṣyati na suhyati nānunīyate na pratihanyate |*
- 6) Matsunami 1965: 307, 327, 329, 337 参照。

〈参考文献〉

- Matsunami, Seiren. 1965. *A Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Tokyo University Library*. Tokyo: Suzuki Research Foundation.
- Harrison, Paul, and Jens-Uwe Hartmann. 2000. “*Ajātaśatrukaukṛtyavinodanāsūtra*.” In *Manuscripts in the Schoyen Collection I, Buddhist Manuscripts I*, ed. Jens Braarvig, 167–216. Oslo: Hermes Academic Publishing.
- Vinita Tseng. 2010. *A Unique Collection of Twenty Sūtras in a Sanskrit Manuscript from the Potala*. 2 vols. Beijing: China Tibetology Publishing House; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press.
- Ye Shaoyong, Li Xuezhong, and Kano Kazuo. 2013. “Further Folios from the Set of Miscellaneous Texts in Śāradā Palm-Leaves from Zha lu Ri phug.” *China Tibetology* 20: 30–47.
- 加納和雄 2012 「アティシャに由来するレティン寺旧蔵の梵文写本——1934年のチベットにおける梵本調査を起点として——」『インド論理学研究』IV: 123–161.
- 加納和雄 2014 「Mahāyānottaratantraparicaya ——カシュミール由来の新出の『宝性論』注梵文断片——」『印度学仏教学研究』62(2): 152–158.
- 加納和雄・李学竹・葉少勇 2015 「『菩薩律義二十』の梵文断片」『密教学会報』53: 17–24.
- 宮崎展昌 2012 『阿闍世王経の研究——その編纂過程の解明を中心として——』山喜房仏書林。

（平成27年度科学研究費補助金基盤C（25370059）、基盤B（26284008）による研究成果の一部）

〈キーワード〉 『阿闍世王経』抄本、梵文写本

（高野山大学准教授）